安倍政権の激走

表題は朝日新聞 3 月 29 日社説のタイトルである。「権力を縛る憲法。歴史の教訓。権力を持つものの自省と自制。メディアや野党による権力の批判的検証ー。敗戦から 70 年の間、これらは日本政治のブレーキとして機能してきた。しかし安倍政権やそれを支える自民党の一部は、ブレーキがあるからこの国の走りが悪くなっていると思い込んでいるようだ。

ひょっとして首相は、最高権力者であるという自覚を根っこのところで欠いているのではないのか。巨大な車にクラクションを鳴らされたら、周囲が一瞬ひるんでしまうのは仕方ないだろう。だからこそ権力は国民をひるませないよう、抑制的に行使されねばならない。首相たるもの「いま」「わたし」の衝動に流されるべきではない。情けないのは抑制や自制という権力の作法を身につけず、けたたましいクラクションを鳴らして回る首相の方である。そうは言っても、安倍政権が激走を続けられるのは、社会の空気が、なんとなくそれを支えているからだろう。

昨今「メディアの萎縮」と呼ばれる事態も、強権的な安倍政権にたじろいでいるという単純なものではなく、道理が引っ込み、液状化した社会に足を取られているというのが、情けなくはあるが、率直な実感だ。ブレーキのない車のクラクションが鳴り響く社会。メディアが耳をふさいでやり過ごしてはならない。そしていま、この社会に生きる一人ひとりにも、できることはあるはずだ。」

同日の長谷部恭男・早稲田大教授と杉田敦・法政大教授の連続対談(写真)も、「安倍政権の激走」をテーマにしている。このところ、戦後日本の政治が守ってきた「一線」を越えるような安倍首相の発言が目立つ。重要な指摘が多いが、この点にしぼり紹介したい。

自衛隊を「我が軍」と。菅官房長官も「自衛隊も軍隊の一つ」と追認しました。自衛隊は戦力には当たらないというのが、戦後日本の一貫した「建前」です。戦前・戦中の軍による国政専断の可能性を断ち切り、人々が自由に生きる空間を切り開いたことこそが、憲法 9 条の意義です。(長谷部教授)　　首相のヤジは、国会への侮辱と言ってもいい。なぜ不信任決議の話すら出ないのか。「自由すぎる首相」のもと、野党もメディアも「首相たるもの」「内閣と国会との関係とは」という根本を見失っているのではないでしょうか。(杉田教授)

(2015 年 4 月 4 日)